

標準解答例（センター）考察

21年度1級建築士合格発表を経て、JAEICのHPに標準解答例が2例掲載されました。本年は製図試験の改変があり、それに対応する解答がどのレベルまで要求されていたのかについて、標準解答例により検証できるので、気づいた点について述べることにする。

●21年は学科の合格率（19.6%）が、厳しかった2年前の水準（H.18：10%）より門戸が広がり、製図についても41.2%と、去年（41.7%）並の合格率であったため、合格者数は5164人と、4000人前後であったこの3年間に比べ、平成17年（5548人）並の5000人台に復帰した。これが、耐震偽装問題に端を発した1級建築士試験の引き締めによる一定の効果が上がったと判断されたものか、今回の試験制度改変に伴う受験者へのアドバンテージと見るべきかについては、不明であるため、次年の合格者数推移により判断することとなる。

●計画の要点の位置付け

掲載された標準解答例2例について、まず注目したのは、今回初めて指定された耐力壁の配置についてであった。標準解答例は図面のみの掲載となっており、今回から要求されたA3用紙に10問の計画の要点を記述したものについては掲載されていない。

○標準解答例1：SRC造による片寄せコア案において、耐力壁はコア部短辺方向(Y方向)のみである。全面開口の北側通り芯の柱・梁についても南コア側の柱・梁と同断面となっており、構造計算を経た実務であれば問題は無いが、図面のみで耐震計画への配慮が解る措置（例：北側柱・梁を一回り大きくし、立面剛性を高める等）が見えない。これで構造的減点が無いものとするならば、当然、計画の要点の「耐震計画について、配慮したこと」において、「コア部雑壁にスリットを入れ、X方向については純ラーメンとして構造計算を行う。」といった記述が必要となる。この事から、計画の要点は1次採点において、図面と一体的に吟味されたことが想像される。

●多様なスパン割

○標準解答例2：RC造による東西軸のセンターコア案で、単位スパンは4.5×9mとなっている。

センターコアである為、耐力壁の配置においては偏芯の無い理想的配置となっているが、単位スパン面積は50㎡を下回り、実務では広く行われているものの、ライセンススクールでは禁じ手の9mスパンを採用している。また、制度改変により、所要室の面積が細かく指定されなくなった為、公約数的な単位スパンの割り出しが意味を持たなくなったので、合格案における単位スパンのバリエーションも増加したものと考えられる。

以上のことから、セオリーにとらわれず、問題条件を満足させるために自由に発想せよ。といったメッセージが去年と同様、読み取れるのではないだろうか。